

鈴木よねと広岡浅子 ～二大女傑と双日の女性活躍推進

大正元(1912)年10月22日の東京朝日新聞には、「女子の発展」と題して、「西に廣岡浅子、鈴木米子(よね)の事業界に雄飛して、男子の実業家と雁行し、若くは之を凌駕せるあり。」と二大女性実業家として二人を並べて紹介している。



広岡浅子は、日本綿花の発起人である広岡信五郎の夫人である。幕末に大阪有数の豪商であった加島屋に嫁いだ後、明治維新により経営危機に陥った加島屋の立て直しに自ら奔走した。浅子は炭鉱業、銀行業、そして後に現在の大同生命保険となる生命保険事業など、加島屋を近代的企業へと転換する主導的役割を果たした。また、女子教育にも熱心に取り組み、渋沢栄一や大隈重信らを動かして、日本初の女子高等教育機関・日本女子大学校(現在の日本女子大学)の設立に尽力した。



広岡浅子と信五郎

さらに浅子は、「女性に欠けているのは経済力である」と、女性が積極的に実業界など社会に進出することを強く求める言葉を残し、「九転十起」を座右の銘として、どんな困難でも自ら乗り越える、女性活躍社会の先駆けといえる実業家であった。

そんな浅子を温かく見守り理解を示したのが、夫の信五郎である。尼崎紡績(現・ユニチカ)と日本綿花は、浅子

ではなく信五郎が主体的に関わった事業であったとされる。この二人の物語は、2015年後期のNHK連続テレビ小説「あさがきた」(主演:波留、玉木宏)でも話題となった。

一方の鈴木よねは、夫である岩治郎急死の際、親族に鈴木商店の廃業を勧められたが、金子直吉の泣きそうな顔を見て、継続を決意。金子直吉ら番頭に経営を任せ、自らは最高責任者として責任を取るのみでほとんど口出しをせず、鈴木商店の家族的雰囲気をつくりだすことに徹した。金子直吉のみならず若手に対しても「任せる」という文化が醸成され、鈴木商店躍進の原動力にもなった。現在の双日が、就活生から「若いうちから多くのことを任せてもらえる会社」との評価を得て、各社の人気企業ランキングの上位に入っている理由も、こうした歴史的な経緯、社風があるのかもしれない。

源流の創業期に女性が活躍した双日は、現在においても大手商社の中で唯一、2016年度から6年連続「なでしこ銘柄」に選定されるなど女性活躍の推進に積極的で、ジェンダーに関係なく活躍できる風土づくりに努めている。



鈴木よね